陳舜臣さんを語る会通信

NO.51　Nov.　2021

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2021年11月10日

『枯草の根』『三色の家』『虹の舞台』・・・“陶展文もの”集合!

陳舜臣さんは1961年、『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞し、作家のスタートを切りました。この作品は、素人探偵・陶展文が活躍する推理小説で、以後、同じ主人公が登場する小説が10作ほどあり、“陶展文もの”と呼ばれています。ここに、“陶展文もの”を集めてみました（編集委員　橘雄三）

《1.『枯草の根』に描かれた陶展文＆近しい人びと》

『枯草の根』は1961年度の江戸川乱歩賞受賞作で、描かれている主たる舞台は当時の神戸です。主人公陶展文は50歳。（詳細は本通信43号をご覧下さい）

「枯草の根」に描かれた陶展文&近しい人々

陶展文	事件の謎解明に挑む素人探偵、主人公。神戸の海岸通り、東南ビルの地階にある中華料理店「桃源亭」の店主兼料理人。中国は陝西生まれの福建育ち。日本に留学、東京の高校、大学を卒業。数年間の帰国を挟み、20数年、日本に居つく。妻・節子、娘・羽容の三人家族。世間からは漢方医としても認められている。父親譲りの拳法が得意。「桃源亭」を主たる生活の場としているが北野町1丁目に居宅をもつ。
衣笠健次	桃源亭の料理人。陶展文の妻の甥。展文の拳法の弟子。
小島和彦	中央新聞の記者。陶展文の拳法の弟子。
朱漢生	安記公司(あんきコンス)の主人。陶展文の弟分のような存在。展文の象棋相手。

陳舜臣さんが**「桃源亭」**を、そのテナントとした東南ビルは、「商船三井ビル」をモデルにしているが、陳さんはこのビルに、思い入れがあるようです。『枯草の根』では、

六階建の東南ビルは戦前の建物で、最近にわかに林立した周囲の新築ビルにくらべると、どうしても色あせたうば桜の感を免れない。　（集英社文庫版p. 23）

と表現していますが、『虹の舞台』では、

現在の商船三井ビル www.belca.or.jp より

いくら背伸びをしてみても、高さでは最近のノッポビルにかないっこない。風格である。駆けだしの新ビルは、いくら工夫をこらしても、風格が出るわけはない。やはり四十年の歳月に磨かれて、しぜんににじみ出るのがほんものなのだ。（徳間文庫版p. 5-6）

と、愛着を込めて描いています。

台湾TVドラマ『憤怒的菩薩(怒りの菩薩)』の一シーン
原作には登場しない陶展文がドラマでは主役

《2.“陶展文もの”一覧》

陶展文登場作品一覧

	題	初出
1	＊枯草の根	1961年、江戸川乱歩賞受賞 1961年講談社
2	＊三色の家	1962年講談社
3	くたびれた縄	「ミステリー」1962年6月号
4	ひきずった縄	「ミステリー」1962年7月号
5	縄の繃帯	「ミステリー」1962年8月号
6	＊割れる	1962年早川書房
7	崩れた直線	「小説宝石」1969年6月号
8	虹の舞台	「週刊小説」1973年4月6日号 ~6月1日号
9	軌跡は消えず	「小説現代」1983年8月号
10	王直の財宝	「小説現代」1984年5月号
	＊は書き下ろし	

『枯草の根』は、本通信第43号で取り上げましたので、あとの作品を順不同で見ていきます。

『虹の舞台』　キャッチコピー、登場人物ほか

徳間文庫版キャッチコピー

神戸三宮の新築ビルに作られる「世界の味センター」にインド料理の出店を決めた宝石商マニラル・ライには、とかくの噂があった。あのネールと並ぶインド独立の英雄チャンドラ・ボースから運動資金の宝石を奪ったというのだ。中華料理店『桃源亭』亭主・陶展文は、同じ出店仲間とともにライの自宅に招かれたが、まさか死体の彼と対面することになるとは…。包丁より推理のきれる名探偵の好評長篇。

主な登場人物ほか　ネタバレにならない程度に

まず、「陶展文もの」共通の登場人物を簡単に記述します。

- 陶展文(とうてんぶん)　事件の解明に挑む主人公。料理店「桃源亭」の店主
- 衣笠健次　桃源亭の料理人。陶展文の妻の甥。展文の拳法の弟子
- 小島和彦　中央新聞の記者。陶展文の拳法の弟子
- 朱漢生(しゅかんせい)　安記公司の主人。陶展文の弟分のような存在。展文の象棋相手

以下、『虹の舞台』固有の登場人物です。

- 小村道男　東南ビルのオーナーである東南汽船の社長
- 沢岡進　もと東南汽船所属ジャマイカ丸船長。三宮にもうすぐ完成するサンライズ・ビルの専務取締役。同ビルにできる「世界の味センター」の開業準備を任されている。陶展文の拳法の弟子
- 甘練義(かんれんぎ)　中国料理の料理人として著名
- 田辺源市　フランス料理の料理人として著名
- マニラル・ライ　本業は宝石商。経営者として「世界の味センター」への出店を進めている。料理人としても相当。神戸での出店に備え、北野町に居宅として古い洋館を買う。チャンドラ・ボースの宝石を横領したと、在留インド人の間で評判が悪い
- ライ夫人弘子　西条弘子。もと銀座のホステス
- 上野浩介　マニラル・ライの番頭。42歳
- 川崎波子　東南ビルのテナント、オブライエン商会のタイピスト。夜は「ムーン・ライト」のホステス
- 大泉敬吾　定年後、趣味で太平洋戦争史を研究している。戦争中、下士官として南方に出征した経歴がある。(陳舜臣さんは、チャンドラ・ボースとマニラル・ライの接点の可能性を語らせるために登場させたと思われる)
- 秋野　マニラル・ライに洋館を紹介した不動産屋
- 桑島真知子　父はアメリカ軍人、母は日本人。ファッションモデルやクラブのホステスの経歴がある。マニラル・ライのかくし女。ライは彼女にマンションまで買い与えている
- 中松鎮夫　宝飾デザイナー兼ブローカー。なかなかのハンサム、35歳。桑島真知子には中松の影がちらつく
- 原辰三　通称ハラタツ。かつて、サイゴンのコックグループの一員。今は、大阪のミナミでふぐ料理店を営む
- ダイットワラ　通称ダイスケ。アウト・カースト出身のインド人。当時、サイゴンのコックグループの一員。仲間うちでは「嘘つき病」で知られていた

(上の画像は毎日新聞社版表紙)

『虹の舞台』というタイトルの意味

『三色の家』はわかりやすいが、『虹の舞台』は、『枯草の根』と並び、わかりにくいタイトルです。作品文中、ヒントがありますが、ネタばれにならない程度に少し引用します。(徳間文庫版p.269)

「なるほど、はじめから話をでっちあげるのは、難しい作業ですからねえ。…まあ、実話の舞台に自分を出すというのはわかりますよ。だけど、どうせ出るなら、良い役で出ればいいじゃありませんか。ライは悪役で出場しているんですよ」

出自をかくし、そこから脱け出したいとの願望を持つマニラル・ライは、実話の舞台を借り、いつか、虹のような実体のない、はかない舞台に身を置いて生きてきたということをいっているのではないでしょうか。

陳さんは、チャンドラ・ボースに負い目？

そう思える箇所がいくつもありますが、一つだけあげます。(徳間文庫版p.102)

慚愧(ざんき)の念もあった。ボースは戦ったのに、自分は戦いから逃げたのではないか？陶展文が目をひらくと、大泉邸の椿の花が（紅い花もあれば、白い花もあるのよ）と、囁きかけるような気がした。

『虹の舞台』初出、『週刊小説』1973年4月6日号を紹介

『虹の舞台』は、実業之日本社発行『週刊小説』に1973年4月6日号から6月1日号までの８週、８回連載されました。第一章～第八章、８章立てになっているのも納得です。探せばあるもので、古本屋で、連載初回の1973年4月6日号を見つけました。喜び勇んで買い求めましたので、ここに紹介いたします。なお、本体に印刷されている定価は百円ですが、私の購入価格はその十倍でした。

当時の文芸界、出版業界の様子がわかって面白いので、画像で紹介いたします。

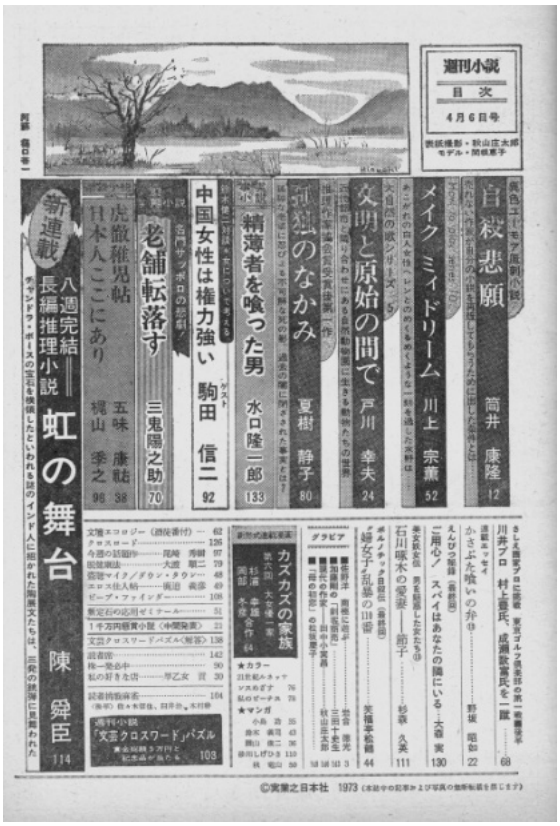
■なお、作者の近況として、次のような文章が載っていました。

マイペースで仕事をする主義の陳舜臣氏、「今度の連載は長編書き下ろしと同じくらいの覚悟でやらなければ…」というので、週刊誌2本、月刊誌1本の連載や単発物の仕事を週の前半に終わらせ、後半の三日間を割いて全力投球してくださるということだ。

「虹の舞台」連載第一回が掲載された『週刊小説』の表紙

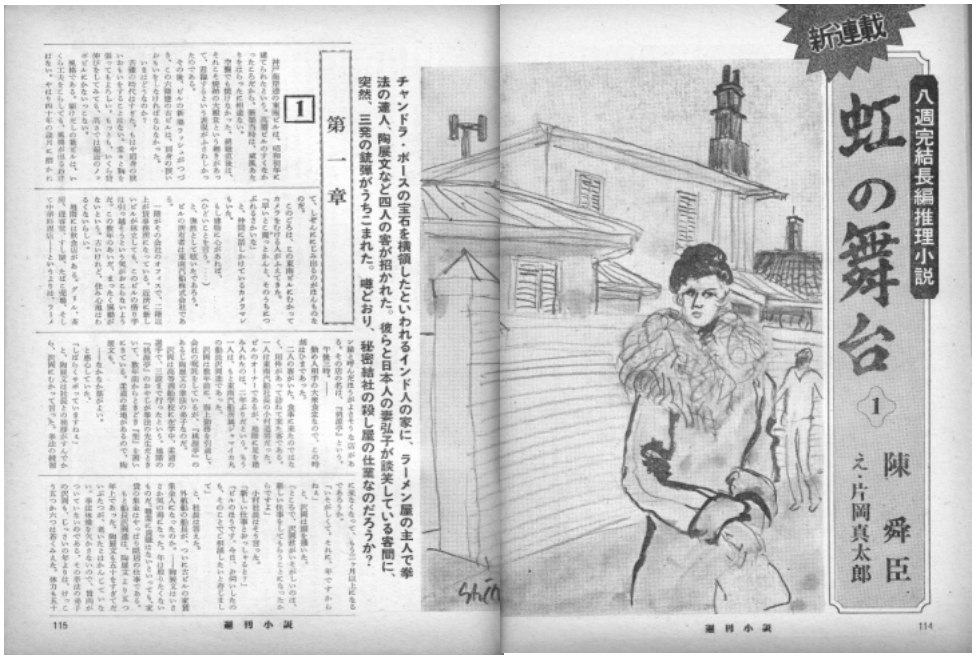
「新連載　虹の舞台　陳舜臣」の文字が目立つ。表紙女優、関根恵子がナイーブ（撮影：秋山庄太郎）

同号の目次



当時活躍していた作家、筒井康隆、川上宗薫、夏樹静子、梶山季之、野坂昭如…がズラリ。つまり、陳舜臣さんのライバルです。

同号、「虹の舞台」連載頁



連載第一、二頁。一頁はタイトルと絵。絵と本文の間に太字で三行のキャッチコピー（惹句）。

「チャンドラ・ボースの宝石を横領したといわれるインド人の家に、ラーメン屋の主人で拳法の達人、陶展文など四人の客が招かれた。彼らと日本人の妻弘子が談笑している客間に、突然、三発の銃弾がうちこまれた。噂どおり、秘密結社の殺し屋の仕業なのだろうか？」

『三色の家』 あらすじ並びに登場人物

『三色の家』(1962年 講談社)は、江戸川乱歩賞受賞第一作です。『三色の家』については、本通信第29号でも取り上げていますので、本号では、講談社文庫版『三色の家』の安間隆次氏の解説を引用するにとどめます。

講談社文庫版『三色の家』
安間隆次氏の解説から抜粋・引用
(登場人物名の追加ほか、傍線、太字など、編集委員が一部、加筆した)

『三色の家』も、**陶展文**(とうてんぶん)が探偵役をつとめることでは変わりないのだが、『枯草の根』『虹の舞台』の場合は、すでに五十を越え、若々しいとはいってもどこかにものうい老いのかげりを感じさせるのに比べて、こちらで探偵眼をきかすのは、まだ二十代の青年である。

昭和八年三月、大学の法学部を卒業し、ようやく東京での長い留学生活に終止符をうって、帰国のための荷造りをしていた陶展文のところへ、一通の速達が届いた。

神田にある中国人留学生寮の部屋で、まる三年間を陶展文といっしょに暮らしたあと、一足先に神戸の生家に帰っていった**喬世修**(きょうせいしゅう)からのものであった。

喬世修の生家・同順泰(どうじゅんたい)公司は、神戸の海岸通りに面したところで海産物などの貿易を営んでいた。その家は一階の倉庫の部分が赤煉瓦、二階と三階は白のモルタル、ただし海岸通りに面した三階の表がわは青色のトタン板で囲ってあり、近所の人は「三色の家」と呼んでいた。

講談社文庫版表紙

陶展文は、前年の夏休みをこの「三色の家」で一カ月ほどをすごし、今度も帰国の途中、立ち寄る約束をしてあったが、速達で喬世修は、父が心臓麻痺で急死したので、日程を早め、すぐ神戸にきてほしい、といってきたのだ。喬世修の父には、故国で渡し舟の船頭をしていたころ、舟の上である金持ちを殺して持ち金を奪い、それを資金に日本で商売をはじめた、という伝説がある。

神戸の喬世修家を訪れた陶展文の前で、不思議な殺人事件がおきる。

喬世修の死んだ父の腹心だった**杜自忠**(とじちゅう)が、輸出用の海産物を乾燥させる干し場で、なぐり殺されたのである。

事件当時、この干し場で被害者は昼寝をしていたのだが、そこへの出入りには、殺しに関係ないと思われる人たちの目があった。万一、入れたとしても、犯行後だれの目にもふれないで出ることは、ほとんど不可能に思われた。そして、複雑な人間関係が浮かびあがる。

喬世修の家には、父の死の前、世修には腹違いの兄にあたるという男(**喬世治**(きょうせいじ))が、故国から突然やってきて、いっしょに暮らしはじめていた。喬世修の妹**純**は、この新しい「兄」にすっかり夢中になってしまうが、「兄」と称する男は、長く中国の田舎で百姓をやっていたはずなのに、本屋の店先で洋書や日本語の本を読むなど、不審な点が多すぎた。

また、杜自忠の妻(**秋子**)の連れ子で、いつもふてぶてしい態度を崩さない**一郎**。

隣家の海産物商桑野商店の店主**桑野善作**と喬世修の父とは、他の商店がやっかむほどの深いつきあいだったが、その父の死後も善作は、何かと若主人世修の世話を焼き、世修と善作の娘**輝子**とは恋仲でもあった。

桑野商店の店員で、世修の父にまつわるいまわしい渡し舟殺人事件の土地からやってきたと自称する青年(**郭文昇**(かくぶんしょう))の存在。近くの組に出入りする沖仲仕で、目つきの気になる大きな黒子(ほくろ)のある男(**佐藤**)。この間、展文の世修の妹純によせるひそかな思いがほの見えたりして、『枯草の根』時代の円熟した探偵の姿が思いおこされ、他の陶展文ものとは一味違う面白さを覚える。

渡し舟の船頭
沈従文(しんじゅうぶん)『辺城』挿絵を拝借

陶展文は、入り組んだ人間関係に目をすえ、やがてある線をたぐりよせるのだが、世修の恋を見守りながら、たどりついた結末の、後味のさわやかさ。彼の人間的な、えもいわれぬあたたかさがにじみ出ていて、極めて印象的である。それは、「枯草の根を悼む」思いと通じあうものである。

つまりは、陳舜臣という作家の創りだす、スケールの大きな虚構世界の中に、核となって在る人間への激しい思いが、ここにもまごうことなく表出されていて、私たちの胸を打ってくるのである。

渡し舟殺人事件■陳舜臣さんは『神戸というまち』で、噂としてではあるが、実在の人物、移情閣主人・呉錦堂に、この話を当て嵌(は)めている。「大人」とか、「寛仁大度」と言われる陳舜臣さんの小説作法としては理解に苦しむ。